

---

MUV-LUV ALTERNATIVE **鴉は大空を渡る**

作者月詠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MUV-LUV ALTERNATIVE 鴉は大空を渡る

### 【コード】

N72680

### 【作者名】

作者月詠

### 【あらすじ】

目を覚ましたらそこは……廃墟！？目付きの悪い男がマブラヴ入り。

## 第・話 『最後の記憶』

??????

「マブラヴ…ねえ?」

俺は黒羽桐佳。  
くろはね としあ

まあ取り敢えず俺の話聞いてくれ。

ことの発端は30分前に戻る。

????14:20???

「まともなロボゲー?」

大学の帰り際、速やかに帰ろうとした俺を引き止めたのは小学校時代からの親友である『白翼弦太』しろつばなけんただった。

「そつだよ鴉!ガンダムなんて目じゃない、リアルなロボゲーだよ  
!」

ほお…?根っからのガンオタがここまでハマるとは…

因みに、『鴉』<sup>カラス</sup>というのは俺の愛称。

普段着が黒主体で、目付きが恐いかららしい。

…目付きが恐くて悪かったな。

「お前の口からガンダムの上に行く存在がでるとはな…」

「やっぱりロボゲーはストーリーも大切だよ！人同士なんてどうにかしてるね」

まあ、こいつは結構なお人好しだからな。

…しかし、こいつは一体何にハマったんだ？

コードギアス…違うな

ヤマト…そら戦艦だ

勇者シリーズ…そっちは俺の趣味だ

…一体何だ？

「てけててん

『マブラヴ・オルタネイティブ』！」

「…18禁…だと…？」

もしやそれはアレでせうか？

(閲覧規制) や (閲覧規制)、(閲覧規制) に (閲覧規制) で (閲覧規制) ！？

「確かに一部そうだけど、ここまでリアルなロボは初めてだよ！

だ・か・ら!」

????14:50???

?一度やってみなっぺ!ちょっとグロいのあるけど…

…やっみるか。

??キング リムゾン!???

「…………ツ!…………ツ!」

涙が…涙が止まらない!

水月さん…!まりも教官…!元訓練仲間に名も無き衛士たち…!!

半月を掛けてプレイしたが…なんと言っ良作!グレンラガンと同等  
…いや、それ以上の熱さだった!

今日はぐっすりと眠れそっな気がする…

??これが、俺が現実世界で覚えていた最後の記憶だった。

第・話 『最後の記憶』 (後書き)

次回

第一話

『紅の姉妹と戦術機』

「あのね？とうかのまっくららはね、おふとんのなかみたいにあった  
かいの！」

罪無き命を救え、鴉！

第一話 『紅の姉妹と戦術機』（前書き）

前回の予告での台詞、入れるシーンが無くて入れられませんでした…

イーニア…ごめん…

## 第一話 『紅の姉妹と戦術機』

???

……け……！こ……ら……ゆうか……出て……けッ！

ここ……お「……ちの……しだ！……え……き……ろき……オオツ！

果てしなく、怒りと悲しみの感情が流れ込む。

ちく……う！かえ……や……れ！……くしよ……ち……しようちく……ようオオツ！

や……！こな……で……い……、……や……！イヤアアアアアアアッ！

「ッ！」

脳内に響き渡る悲鳴と紅い『ナニカ』が広がった瞬間、意識が覚醒した。

「……ッハア……！ハア……！……ッ……ハア……」

瞳孔が開き、心臓は早鐘を打つ。  
ショッキングとかグロテスクな夢とかの問題じゃない……そんなレベルじゃない！

マブラヴのゲーム中でも聞かされた、『赤銅色のナニカに喰われる女性衛士』の声そのものが頭に響く。それもご丁寧SAN値 直葬に産地直送、フルボイスの映像付きと来たもんだ。

気が滅入る前はかなり凹むぞ…(汗)

『……………』

…なんか視界の端に白い…いや、何も見なかった。

徐々に近づいてるなんて、俺は知らないぞ!?

距離的に既に1mとか知らないからな!?

よだれ涎垂らして指咥えてこっち見んな!知らないったら知らないんだからねっ!…って!

「キモいんじゃゴラアアア!!(俺もお前も!)」

相手、BETAの『ソルジャー兵士級』を素手でお構いなしに全力でアッパーカットをする。

打ち抜かれた兵士級の顎は碎け、兵士級の頭は縦一線に真っ二つになる。……………って何ですと!!?!?

兵士級の頭が『真っ二つ』!?

「嘘だろ…!?!」

今度は背後から象の鼻のような腕を持つ『ウォーリアー闘士級』の腕が迫るが、今度は左手で薙ぎ払うとそのモーシヨン通りに闘士級を切り裂く。

思わず両手を見た。  
いや、『見てしまった』

「何だよ…これッ！」

その両手は、人の腕と、敵対するはずのBETAである『要撃級』グラップラーの腕が混ざったような腕と成っていた。

それ以外に変化は無かった。

思考、意識が混濁する。

「…か、こっ…！」  
「……くれ！イー…ア！」

若い女性の声二つと、元の人の腕に戻る自分の腕を見たのを最後に意識は遠退いていった…。

鴉・暗転…

????

突如、イーニアに連れられ、無理矢理チエルミナートルに押し込まれて無断発進させてしまった私、『クリスカ・ビヤーチエノワ』は訳も分からず妹分的…いや、妹と同じ様な存在である『イーニア・シエスチナ』と荒廃した旧市街地へ向かっていた。

《何をしている！ビヤーチエノワ少尉、シエスチナ少尉！直ちに基地に戻れ！！》

言わずもがな、上官である『ファイカーツィア・ラトロワ』中佐に怒鳴られる。

「すみません中佐！しかし…」

「ごめんなさい、ラトロワ中佐！でも、イーニアいかなきゃ！」

焦るような…しかし、嬉々とした表情でもあるイーニア…一体どうしたというのだ？

《理由を説明しろ！シエスチナ少尉！》

「わかんない！けど…こころが、ほわ…ってなるひかり、感じるの！だから、たすけなきゃ！」

イーニアと私は、過去で所謂…『感じる力』を手に入れた。

イーニアとまではいかないものの、（恐らく）平均並に感じる事が出来る。

確かに、BETAが出す感じではなく…心を優しく包む様な温かい光を感じる。

しかしそれは、最初感じた時よりも、あまりにも小さく感じた。弱っているか…若しくは…

《…軍人としては、命令違反で処理するところだが…》

ラトロワ中佐の言葉が、走るチエルミナートルに響く。

《私個人としては、生き残っている人類を救ってくれ…》

「…っ、うん！」

「了解！」

BETA: Beings of the Extra Terrestrial which is Adversary of human race.

『人類に敵対的な地球外起源種』: 1973年から約30年近く戦っている相手に、未だ決着は着いていない。

対策を立てようにもすぐに対応され、そしてさらに対策を…というイタチごっこの繰り返しだった。

BETAの目的は未だ分からない。

だが、30年間変わらぬ事実がある。

『BETAは地球を欲している』という事。

私たちはとある『試験体』を受け取りに日本の神奈川基地に来ている。

アラスカのユーコン基地に要請が来るとは予想外だったが、イーニア曰く「助けを求めている」らしい。

そして日本に到着してから二日後…つまり今日、試験体が基地に増設してある研究所から脱走。

それから、搜索に関するブリーフィング中にイーニアが私を引きずって現在に至る。

「こんらんしてる…」

「…イーニア？」

「じぶんは『ひと』なのに、『<sup>BETA</sup>はけもの』のちからをもってるからこんらんしてる…」

そう言うイーニアの表情は、悲愴に満ちていた。

クリスカ・操縦に集中

ラトロワ…

人でありながらBETAの力を…か。

シエスチナ少尉たちが飛び出した後、私は研究所の監視カメラを見ていた。

逃げ出す試験体が言った一言…

【たすけて】

同じ人として、研究所の人間に怒りを感じた。

送られた資料には、ただ『試験体』としか表記されていなかった。

しかし、蓋を開けてみれば研究と称した違法の数々。  
人体実験など星の数ほどあった。

今回の試験体も、その違法人体実験の被害を受けた者。

内容は、  
【捕獲、回収したBETAの一部を人間に移植する】  
ことだった。

ビヤーチエノワ少尉とシエスチナ少尉があの『計画』からの出身者と分かっての要請だったのだろう。  
今ではそれが理解できる。

下手をすればアメリカ軍上層部よりも質が悪い。

《こちらチエルミナートル。熱源を三つ…ッ!?!、いや、『一つです!』》

ビヤーチエノワ少尉…クリスカからの通信に司令室が騒然とする。

BETAか…はたまた例の試験体が……

《クリスカ!このかんじ、きっとそうだよ!》

《な…!?!待つんだイーニア!》

…音と音声の状況からしてシエスチナ少尉…イーニアがチエルミナートルから降りたか。

クリスカ、イーニア…頼むぞ。

ラトロワ…視点変更

クリスカ・イーニアを追跡中

「クリスカ、こつち！」

「待ってくれイーニア！」

会話だけを見れば森を優雅に走り回る姉妹…って私は一体何を！？  
…まあ、ともかく。私たちが入った廃墟の内部には兵士級と闘士級の死体と、私たちと同じ髪の色をした12歳くらいの子供が倒れていた。

「だいじょうぶ？しかりして！」

「イーニア、この子は大丈夫。寝ているだけよ」

「そつか、よかつたあ〜！」

喜ぶイーニアの傍で、私は二体のBETAを見た。

この子、見たところ武装はしていない。

なのに二体のBETAは二つに切り裂かれていた。

（この子は一体…）

そのときの私は気付かなかった。

後ろから兵士級が迫っていたことを…

「…！ クリスカ、うしろ…！」

気付いた頃には既に兵士級は目と鼻の先。

（私は…ここまでか…イーニア、ごめん…）

そう思っていた私…  
だが、痛みはいつまで経っても来なかった。

恐る恐る目を開けると、見覚えのある『触手』が私とイーニアの後  
ろから伸びていた。

その触手は、BETA種で圧倒的な大きさを誇る、『要塞級』の触  
手であった。

しかし、野外ならいざ知らず、ここは廃墟とはいえ屋内。

後ろを振り返ると、先程保護した子供の左手から、私たちを避けて  
兵士級を貫く触手が伸びていた。

「俺の目の前で人間襲うなんざ良い度胸してるじゃないか…」

明確なまでのBETAに対する殺気。  
銀の髪に切れ長の緋色の瞳…その威圧感は『鴉』を彷彿とさせた。

「…おととい来やがね。化けシロアリ」

兵士級の一点を貫いた触手は刃のようになって、兵士級を粉微塵に  
切り裂いた。

「ふー…大丈夫か？アンタら」

シユルシユルと触手を体に戻した子供は頭を掻きながら私たちに尋  
ねる。

「わたしはへいきだよ。クリスカは？」

「あ、ああ。私も平気だ」

普通に接するイーニアに対し、私は少し…この子供に畏怖を感じた。

しかし、先程イーニアが言っていた、『人でありながら化け物の力がある』とはこの事だったか…

「きみも、だいじょうぶ？」

「ああ。見ての通りしっかりな！」

…イーニアも気にしていないようだし、大丈夫か。

「…ッ！」

「…？どうしたの？」

何かを感じた少女（いや、少年？どっちだ？）はいきなり立ち上がると、すぐ傍に開いていた穴に飛び込む。

「な!？」

「え、ええ!？」

一体何だというんだ!？

クリスカ・混乱

???

呼んでる…何かが呼んでる。  
ただ、俺を呼んでいる。

穴に飛び込んで、暫く歩くと、大きな何かを見つけた。

手触りとしては布。

BETAの力なのか、真つ暗なここでも壁や地面がはっきり見える。  
布を引つ張つて布を剥がすと、そこには……

「戦…術機？」

日本の戦術機が、ほぼ全部合わさつたような戦術機が跪いて、そこに佇んでいた。

フロントライトと装甲が顔のようになっていて『不知火』の胴体。  
少々荒々しくなった『撃震』の右腕と肩装甲。  
細身ながらも厚い装甲になっている『武御雷』の下半身。  
頭頂部は『不知火』ベースに威圧感漂う角があった。

更にこの機体…いや、この『世界』にあるはずのない装備があった。  
”本来”は銀色のはずがガンメタリックカラーになっている”異次元”の武装…『輻射推進型自在可動有線式左腕部』。  
まあ、アニメでは右腕だったけど。

ふと、戦術機の傍にある石板に気付く。

『試作型戦術歩行戦闘機【火産霊】』

「かぐ…つち…?」

其処には、日本の神道で火を司る神の名があった。

第一話 『紅の姉妹と戦術機』 (後書き)

次回

第二話

『実力と帝国、そして親代わり?』

「実力に姿形は関係無い。必要なのは心構えだ」  
たましい

罪無き命を救え、鴉!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7268o/>

---

MUV-LUV ALTERNATIVE 鴉は大空を渡る

2010年11月16日01時23分発行